

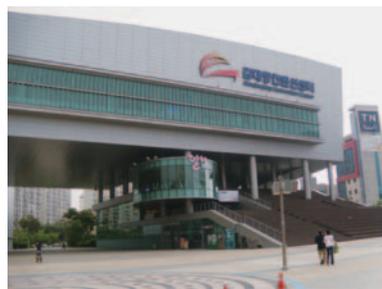


OCTOBER 2011

No.20

東京大学医学教育国際協力研究センター  
International Research Center for Medical Education

# CENTER NEWS

[www.ircme.u-tokyo.ac.jp](http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp)

## Contents

- |   |   |
|---|---|
| ● <b>Best Teacher's Award 受賞</b> ..... 2<br>講師 錦織 宏       | ● <b>模擬患者つづきの会</b> ..... 5<br>特任研究員 三木 祐子                         |
| ● <b>東日本大震災医療支援活動</b> ..... 2<br>講師 錦織 宏                  | ● <b>医学教育基礎コース</b> ..... 6<br>講師 錦織 宏                             |
| ● <b>韓国医学教育学会</b> ..... 3<br>教授 北村 聖                      | ● <b>特任准教授ゴミンダ・ポナンペルマ先生の活動報告</b> ..... 6<br>講師 錦織 宏・特任専門職員 三浦 和歌子 |
| ● <b>AMEWPR (西太平洋医学教育連盟)</b> ..... 3<br>講師 大西 弘高          | ● <b>東京大学医学教育セミナー(平成23年4月~9月まで)</b> ..... 6<br>講師 大西 弘高           |
| ● <b>台湾出張</b> ..... 3<br>講師 大西 弘高                         | ● <b>外国人客員教授就任挨拶</b> ..... 7<br>Clarence Dennis Kreiter, Ph.D.    |
| ● <b>アジア太平洋医学雑誌編集者会議</b> ..... 3<br>教授 北村 聖               | ● <b>着任挨拶</b> ..... 7<br>大学院生 春田 淳志                               |
| ● <b>第11回医学教育国際協力研究フォーラム</b> ..... 4<br>特任研究員 片山 亜弥       | ● <b>着任挨拶</b> ..... 7<br>研究生 小林 智子                                |
| ● <b>JICA インドネシア国立イスラム大学 大学運営短期研修</b> ..... 4<br>講師 大西 弘高 | ● <b>センター新ホームページ紹介</b> ..... 8<br>技術補佐員 澤山 芳枝                     |
| ● <b>日本医学教育学会参加報告</b> ..... 5<br>教授 北村 聖・講師 錦織 宏          | ● <b>センター日誌／編集後記</b> ..... 8                                      |
| ● <b>欧州医学教育学会 (AMEE2011) 参加報告</b> ..... 5<br>講師 錦織 宏      |   |

## Best Teacher's Award 受賞

講師 錦織 宏

東京大学医学部には教員の教育業績を評価するために、Best Teacher's Award の制度が設けられている。当センターでは、医学教育国際協力研究部門の元助教の大滝純司先生が以前に受賞しておられるが、医学部の教員の中から優れた教育を行っていると考えられる教員が毎年3名選ばれる。そしてこの度、不肖私が2010年度の賞を頂くことになった。対象となった教育活動はPBLのチューターで、評価は学生による複数回の多面的評価、45点満点中44.8点という結果であった。日頃からこのPBL以外にも学生教育には積極的に関わってきたつもりなので、今回の受賞を素直に嬉しく感じている。

ところで自分は医学教育を専門にしていることもあって、「教育業績をどのように適切に評価すればよいか?」という問いについてよく考える。そもそも医学教育研究を進めながら「教育の効果を実証することって難しいなあ」と常々感じているのだが、最近は、主観的な評価を重ね合わせる「間主観性」という考え方をいけるとよいかも、と思っている。米国で主に用いられているティーチングポートフォリオもそのような考え方を実践的な形に落とし込んだ教育業績評価のツールであり、「様々な形で行われる教育活動の見える化」とその「多面的な評価」が基本的な姿勢だ。また「よい教育者」と一言でいっても、レクチャーのうまい人、ファシリテーションのうまい人、教科書を書くのが得意な人、試験作成

の上手な人、優れたロールモデルなど、非常に多様であるため、それぞれの分野において「見える化」と「多面的な評価」ができれば理想的だろう。ただ一方でこのような評価方法を導入すれば、評価コストの問題が新たにあがってきそうではあるが。

これまでの自分の診療・教育活動を振り返ってみれば、自分以外にも教育に頑張っている仲間は非常に多かった(しかも多い)。一方、熱心に行っている教育が適切に評価されなかったためにパーンアウトした人も少なからずいた。現在、日本医学教育学会で進めている医学教育専門家認定制度の整備にも微力ながら貢献しているが、「教育に頑張っている人がちゃんと評価される」ようになるよう、今回の受賞を機にさらに尽力したいと考えている。先生方には引き続きの御指導・ご鞭撻をお願いさせていただき次第である。



## 東日本大震災医療支援活動

講師 錦織 宏

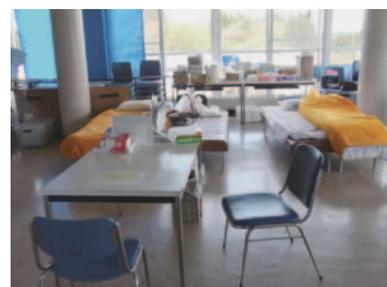
2011年3月11日の東日本大震災の発生から数日後、東京大学医学部附属病院の職員のMLに、東北大学を通じた緊急医療支援要請の連絡が流れた。形態は東京大学・千葉大学・名古屋大学によるローテーションであり、1回の派遣が4~5日、チーム編成は医師2名・看護師1名・薬剤師1名・事務1名である。「国立大学チーム」と称されるこの医療チームは、当初石巻、その後は南三陸町で医療支援活動を行った。今回はこのチームの一員として、4月30日~5月4日まで南三陸町の戸倉地区で支援活動を行ってきたため、その内容について報告する。

朝、東大病院に集合してから、病院の車に乗り込んで東北道を北上した。南三陸町での支援活動は急性期を過ぎて、各地に散らばっていた医療拠点を統廃合する時期に入っていた。医療・物流の拠点であるベイサイドアリーナに到着後、登録を済ませ、今回の活動拠点となった戸倉自然の家に設置された仮設診療所に移動した。この診療所では、長椅子を診察ベッドに、机を診察用に用いるなどの工夫をして、簡単だが立派な診察室を作っていた。

医療支援活動は、平時より国際協力活動に熱心なJapan Heartの看護師さんたちと協同で行った。外来診療を中心に行ったが、患者さんは、整形・皮膚科の診療範囲も含めて多様な健康の問題を訴えてこられ、まさに自分が専門としているプライマリ・ケアが求められる現場であった。また家族を亡くすなどして精神的に問題を抱えておられる方も多く、改めて心のケアの重要性を認識させられた。

当然であるが、被災地の医療現場では、どこにどのくらいの規模の医療機関が存在して、そこにどんな能力の医師が何人くらいいるのかがイメージしにくい。よって地域医療の全体像が俯瞰できず、自分が担うべき役割が理解しにくかった。また、医療支援のゴールが「もともと医療過疎である南三陸町の医療に形に戻す」ことであったため、過度な医療ニーズの掘り起こしはしないように指示された。これに対し、あくまで一人のコマとして働くべきという意識と、短期であっても困っているより多くの人を助けたいという思いとの間で、葛藤した。またボランティアの持つ独特のパターンリズムにも考えさせられるところがあった。

ただ、今回の活動では「困難な環境に身を置くこと」について大いに考えさせられた。「医療崩壊」や「モンスターパシエント」などの言葉を耳にするようになって久しい日本の医療だが、被災地では「助けあう」ということがあまりにも自然に行われていた。支援活動という形で東北に入ったが、自身が学ぶところの方が多かったようにも感じている。次は、また別な形で、東北の方たちと縁があるといいなと思っている。



▲ 戸倉仮設診療所

## 韓国医学教育学会

教授 北村 聖

西太平洋地域医学教育学会と兼ねた韓国医学教育学会に出席してきた。場所は、1980年に民主化を求めて民衆が立ち上がったことで有名な韓国南部の都市光州である。ソウルからバスで約4時間、道がよいのでそれほど疲れない。また景色も日本の農村風景とまったく変わらない。

学会では、コアカリと共用試験をはじめとした日本の医学教育改革の現状と、卒後医師臨床研修必修化の評価について講演した。日本の教育改革や臨床研修制度についてはアジアの関係者は本当によく知っていて、その後の評価に強い関心を持っていた。

オーストラリアからの報告があり、地域の医師不足が深刻であり、その際医師の総合性と専門性のどちらを重視するか悩ましい問題であることが紹介され、日本のみならず世界中で同じような課題に直面していることが感じられた。

震災の後初めての海外出張であり、各国の方からお見舞いの言葉をいただいた。また、羽田からの便を使ったため韓国が極めて近くなった印象である。今後は、より密接に連携してゆく必要があると感じられた。



▲ 学会の様子

## AMEWPR (西太平洋医学教育連盟)

講師 大西 弘高

西太平洋医学教育連盟 (Association for Medical Education in Western Pacific Region: AMEWPR) は、世界医学教育連盟 (World Federation for Medical Education) の6つの支部の一つで、WHOの西太平洋支部に管轄される国々が含まれる。2006～2010年は東京女子医大医学教育学の吉岡俊正教授が AMEWPR 会長だったため、東京で隔年に会議を2回開催し、私が事務局長を務めてきた。2010年に会長が韓国の Ducksun Ahn 教授に交替し、隔年開催を毎年開催すると宣言するなど、非常に精力的な活動を展開しておられる。そんな中で、2011年6月9～11日に光州で開催された韓国医学教育学会の会期に合わせて、2011年の会合が開かれた。

AMEWPRの議題の大半は、WFMEのglobal standardなど、認証評価に関連した内容である。韓国、マレーシア、シンガポールは以前から認証評価がシステムとして動いているが、最近台湾でも機能し始めている。また、モンゴルが国際的な外部評価に意欲を示し、吉岡前会長、Ahn 現会長らのチームが秋に現地調査に入る予定となった。

認証評価に関しては、米国 ECFMG が USMLE の受験要件として2023年から国際認証評価を受けている医学部の卒業生に限定する方向性を打ち出している。現状では日本では医学部の分野別認証評価の枠組みはないが、今後急速な整備が進んでいくだろう。



▲ AMEWPR 会議

## 台湾出張

講師 大西 弘高

台湾では、初めての国家試験での臨床技能試験が、パイロットの扱いで、2011年4月23-24日、4月30日-5月1日にわたって開催された。この記念すべき臨床技能試験を4月23-24日に視察したため、概要を記したい。

構成は、12ステーションで、8ステーションがSPとの面接を含む内容、4ステーションが操作的技能で、内科、外科、産婦人科、小児科、救急がこの中に含まれていた。各ステーションは8分課題で、各移動が2分、中間に15分の休憩をはさみ、各学生は2時間15分ほどで試験を終わることになる。

最も特徴的なのは、全国一斉試験である点だった。各大学・病院に情報センターがあり、互いにTV会議システムでつながれていて、モニターされていた。23日朝、試験会場にキャリアバッグが運び込まれ、解錠され、国立台湾大学医学院附属病院の Hong-Shiee Lai 医学教育部主任が封印された紙包みを開封して、初めて出題内容が明かされた。SPや採点者は、課題内容を入念にチェックしていた。試験開始30分後にはプレスリリースがあり、全国11カ所の試験会場のモニターの様子などが映し出されていた。まだ試験結果、合否判定などの情報はないが、着実に実技試験は進捗している印象を受けた。



▲ 台湾国家試験臨床技能試験の課題開封

## アジア太平洋医学雑誌 編集者会議

教授 北村 聖

8月28日から4日間、韓国ソウルの高麗大学で開催された。昨年はベトナムで開催され、来年はマレーシアと決まっている。WPROの加盟国10数カ国から30人程度が集まり、恒例になり、ほとんどが顔見知りであった。和気あいあいとした雰囲気の中で開催された。今年はすぐ横で、ガイドライン国際ネットワークの会議も開催されて賑やかであった。自分は、昨年副会長になり、大した仕事はしていないが、司会などそれなりに貢献したいと思っている。

今回の発表は、日本における医学雑誌編集のためのガイドライン策定についてで、また、ガイドラインはできていないものの、WAME (世界医学雑誌編集者会議) のガイドラインなどをと、有用なガイドラインを作りつつあることを報告した。

会議の大きな話題の一つに、PubMed Central という全文を公開しているサイトについて、より多くの雑誌が登録すべきとの意見が多かった。米国国立図書館の一部であり多くの世界的雑誌が公開されている中で、日本の雑誌が極めて少ないとの報告があった。今後の課題と認識した。



▲ 懇親会にて

# 第11回医学教育国際協力研究フォーラム

特任研究員 片山 亜弥

当センターでは、医学教育研究・国際協力による人づくりについて議論する場として、年1回医学教育国際協力研究フォーラムを開催してきた。第11回目となる今回のフォーラムは、「アフガニスタンの医師養成と保健システム」をテーマに6月28日(火)に行われた。センターでは、2005年から3年間 JICA アフガニスタン医学教育プロジェクトを実施し、その後2008年から行ってきたフォローアップ協力は今年度で終了となる。その節目として、今回のフォーラムでは、アフガニスタンの医師養成に携わってきた先生方をお招きして、これまでの取り組みや課題について学ぶとともに、今後の展望について議論した。

第一部では、JICA、当センター、大阪市立大学による協力の報告に加えて、カブール医科大学 Fawad Pirzad 教育開発センター長よりこれまでの取り組みや課題が述べられ、さらにレシャード・カレッド医師からは、都市と地方の医学教育や保健医療の格差について指摘がなされた。地域格差の問題についてはパネルディスカッションにおいても議論され、アフガニスタンにお



▲ パネルディスカッションの様子

る医学教育の質の標準化が重要な鍵となることが認識された。

最後に、ご出席下さった参加者の皆さま、ご挨拶下さった在日アフガニスタン大使館 Sayed M. Amin Fatimie 大使、ご講演下さった先生方、ご後援下さった JICA 関係者の皆さまに、この場を借りて深く御礼申し上げたい。

## 〈プログラム〉

開会の挨拶 東京大学医学教育国際協力研究センター 北村聖教授  
在日アフガニスタン大使館 Sayed M. Amin Fatimie 大使 ご挨拶

### 第一部 講演

- (1) 国際協力機構人間開発部保健第二グループ保健第四課 稲垣良隆 氏  
「アフガニスタンの保健人材育成に関する JICA の方針と取り組み」
- (2) カブール医科大学教育開発センター Fawad Pirzad センター長  
「カブール医科大学での医学教育改革：この10年を振り返って」
- (3) 東京大学医学教育国際協力研究センター 足立拓也 客員研究員  
「アフガニスタン国医学教育プロジェクトおよびフォローアップ協力」
- (4) 東京大学医学教育国際協力研究センター 大西弘高 講師  
「アフガニスタンでの保健人材育成の今後」
- (5) 大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学 山野慶樹 教授  
「カブール医科大学整形外科への支援」
- (6) 医療法人社団健社会レシャード医院 Khaled Reshad 院長  
「アフガニスタンにおける医学教育の目標と課題」

### 第二部 パネルディスカッション

開会の挨拶 東京大学医学教育国際協力研究センター 大西弘高 講師

# JICA インドネシア国立イスラム大学 大学運営短期研修

講師 大西 弘高

2011年7月4～15日、インドネシア・イスラム大学の事務職研修を実施した。これは、2010年8月9～20日に保健医療学部の教員研修を実施し、評価が高かったことを受けてのオファーであり、喜んで引き受けることにした。ただ、事務職員への2週間もの研修は日本でも全く例がないし、それを言語や文化、制度の全く異なる相手に実施して、どこまで通じるのか大きな不安を持って準備作業が始まった。

まず、英会話能力に関して教員よりも一段低いという事前情報を受け、1週間東大、1週間マレーシアの国際医学大という割り振りにすることにした。マレーシアとインドネシアは、ほぼ同じマレー語を話すため、互いのコミュニケーションが比較的容易だろうと考えたからである。また、イスラム大学保健医療学部は医学部、看護学部、薬学部、公衆衛生学部からなるが、いずれも地域現場での臨床家育成が大きなミッションである。東大は研究者育成に重点をおくが、国際医学大が医学部、薬学部、看護学部などを含めて臨床家に力を入れている点も、マレーシアに行く大きな動機づけとなった。

蓋を開けてみると、今回の研修員はコミュニケーション能力が高く、教員に負けず劣らず熱心に研修を受けていた。東大では、医学部事務のみならず、本部にも大変お世話になった。国際医学大の内容もよく練られており、概して満足度の高い研修になったと自負している。



▲ マレーシア国際医学大でのイスラム大事務職研修

4/Jul (Mon)	オープニング、プログラム概要、東京大学の概要 国際交流、学生支援 財政 情報基盤	大西 (IRCME) 山口 (国際課) 小川 (経理課) 早野 (情報基盤センター)
5/Jul (Tue)	医学部と医学系研究科、附属病院と臨床実習 医学部長挨拶 薬学部と薬学系研究科	北村 (IRCME) 宮園 (医学系研究科) 一条 (薬学系研究科)
6/Jul (Wed)	医学教育の近年のトレンド 大学のカパナンス、リーダーシップ	大西 大西
7/Jul (Thu)	図書館訪問と概要 電子ジャーナル 医学部事務見学 臨床医学の改善	村上 (医学図書館) 大西 後藤 (医学部事務) 大西
8/Jul (Fri)	病院見学、卒後研修の管理 Q&A、研修修了セレモニー	北村 大西
11/Jul (Mon)	オープニング、国際医学大概要 臨床スキル実習室 (CSU)	Elango (CtME:医学教育センター) Jagmohni, Teoh (CSU)
12/Jul (Tue)	情報基盤部門、E-Learning 医学博物館 PBLとその管理	Chin, Zaid (情報基盤センター) Maria (医学博物館) Yu (PBLワーキンググループ)
13/Jul (Wed)	臨床分校と病院概要、カリキュラム 臨床分校教務課 臨床スキル実習室	Kew, Zainur (臨床分校) Sharmini (教務課) The (CSU)
14/Jul (Thu)	マレーシアの認証評価システム 授業評価とその質管理	Norma (教務課) Joachim, Katrina (CtME)
15/Jul (Fri)	教務課の役割 学生課の役割 マーケティングとHP 予算管理	Ong (教務課) Kuan (学生課) Low (マーケティング) Chiu (経理課)

# 日本医学教育学会参加報告

教授 北村 聖

7月22日から24日まで広島で開催された。大会長は医学部長の吉栖正生先生で東大のOBである。今回、評議員と理事の選挙があり、当センターの教員3人が評議員に、大西、北村が理事に選ばれた。

特別講演では、当センターの客員教授であったノエル先生の日本の医学教育評が多くの聴衆にインパクトを与えた。「日本の女子サッカーは世界と同じルールで戦っているが、日本の医学教育は世界と同じルールでやってはいない」との名言があった。

自分は、「専門医と大学院」というワークショップの司会と発表を行い、特に医学系大学院のあり方について議論した。研修医の必修化に伴い大学院が減少しているとの意見があるが、大学院教育の実質化についても重要であるとの意見があった。

もうひとつ、医学教育学会のCOI（利益相反）についても、日本医学雑誌編集会議での取り組みを紹介した。

地方で開催されたにもかかわらず、非常に多くの研究者が集まり極めて有用な議論があったと思う。



▲ 広島国際会議場

講師 錦織 宏

今年で第43回を数える日本医学教育学会大会は、7月22～24日に広島大学主催で行われた。今回は、医学教育専門教育成検討委員会に関連した活動の一環として、プレコンgress・ワークショップの主催、シンポジウムのパネル、そして特別ポスターセッションの座長を担当した。ワークショップでは当センターに所属する大学院生の春田淳志先生を加えた委員のメンバーとともに、医学教育ポートフォリオの一部とその評価方法を参加者に体験してもらった。またシンポジウムでは、委員の先生方とともに認定制度の概要について紹介し、今後の方向性について聴衆とともにディスカッションした。そしてその後の特別ポスターセッションでは、医学教育ポートフォリオに含める「教育実践の振り返り」のポスタープレゼンテーションを、上記の春田先生に加えて、小林智子先生（当センター）、田上佑輔先生（東大腫瘍外科）、横林賢一先生（広大総合診療部）の4名の先生方に行ってもらった。教育活動の「見える化」への旅はようやく第一歩を踏み出したところであるが、ぜひよい形にまとめていきたいと思う。

また当センターの大西弘高講師と元助教の大滝純司先生が座長を務めた医学教育に関するシンポジウムでもパネルを務めさせていただき、学会の委員会活動に加えて、自身の行ってきたアクション・リサーチについても紹介した。この研究手法に関しては学会の後も複数の先生方から問い合わせを頂いたが、今後さらに経験を深めていければと考えている。



▲ 特別ポスターセッションの会場で発表者、委員の先生と

# 欧州医学教育学会(AMEE2011)参加報告

講師 錦織 宏

今年で8回目の参加となったAMEE2011。今年は音楽の都ウィーンでの開催されたこともあって、世界中から3000名弱の参加があり、例年にも増して大きな盛り上がりを見せた。中でも医学教育における国際的質保証が全員参加向けのセッションとなっており、米国ECFMGの認定問題も含めて、医学教育のグローバル化が大きな話題の一つになっていた。

そんな中、日本からも約30名の参加があり、懇親の場であるJapan Nightの幹事を今年も務めた。名古屋大学時代の教え子（吉田多恵美先生）がウィーンで医師として働いており、彼女に色々アレンジしてもらった。オーストリアの伝統料理を出す店には民族衣装を着た店員もおり、とても素敵な時間を過ごすことができた。

前後したが、学会大会では、論文化したHDPEの一般口演発表を行い、また臨床診断推論のセッションの座長を務めた。口演発表では最終日の最後の時間帯だったにもかかわらず、立ち見ができるほどの聴衆が入り、発表の後も質問の行列ができるという状況で、この研究をさらに進めるモチベーションを得た。来年以後も続きを発表できればと思っている。また初めて務めた座長は、参加者や発表者から色々な議論を引き出すことができた。参加者の一人から直接、「非常にすばらしいファシリテーションだった」というフィードバックまでもらえたので、一応、務めは果たせたように感じている。

来年のAMEE2012はフランスのリヨンで開かれる。欧州医学教育学会というより国際医学教育学会の色が強くなってきた本学会。引き続きインスパイヤし、またインスパイヤされに参加しようと思っている。



▲ 満員の聴衆を前に

# 模擬患者つつじの会

特任研究員 三木 祐子

模擬患者つつじの会が発足して、今秋で4年目を迎える。現在、模擬患者は本学と東京医科歯科大学各々に属し、医学教育に貢献している。

模擬患者の活動量増加に伴い、今年度は模擬患者の能力評価を実施してきた。先日、共用試験OSCEに参加した模擬患者に対し、評価者の先生方に本会作成の評価票（1.演技力:リアリティ、2.シナリオの医学的内容に忠実に演技している、3.学生の1つの質問に対し答えすぎでない）を用いた評価をお願いした。回答結果をもとに、本会の代表（2大学の教員）から模擬患者へのフィードバックを行ったが、標準模擬患者としての能力向上に帰するものであると期待したい。

一方、授業に関わる模擬患者としては、演技力向上を目指すべく、俳優兼演出家を外部講師に招き、2度にわたりご指導頂いた。高い資質をもった模擬患者のさらなる活躍を望んでいる。



▲ つつじの花の前にて 於東大山上会館

## 医学教育基礎コース

講師 錦織 宏

当センターでは今年度より、東京大学医学部の Faculty Development の一環として、医学部教員（特に中堅～若手教員・新任教員）を対象に、実践的な教育法について基本を一通り学べるコースを開始した。同コースは月に1回、平日の夕方に実施予定で、人数に余裕があれば東大外部の医学部教員・医師も参加出来る形をとっている。これまでに開催した内容については以下の通りである。当面は「教員になったけど教育について教わったことがない」先生方を減らすことが目標だが、将来は医学教育に関する基本的内容をカバーしたFDのモデルとなることを目指したいと考えている。

第1回	日時：2011年4月27日（水）18時～20時 テーマ：新たな教育観で教えるための理論 講師：大西弘高（医学教育国際協力研究センター講師）
第2回	日時：2011年5月20日（金）18時～20時 テーマ：学生・研修医・若手研究者への妥当なフィードバックとは？ 講師：錦織宏（医学教育国際協力研究センター講師）
第3回	日時：2011年6月20日（月）18時～20時 テーマ：魅力あるレクチャーの方法 講師：北村聖（医学教育国際協力研究センター主任教授）
第4回	日時：2011年7月20日（水）18時～20時 テーマ：学習者評価 講師：大西弘高（医学教育国際協力研究センター講師）
第5回	日時：9月12日（月）18時～20時 テーマ：小グループによる教育・学習法 講師：錦織宏（医学教育国際協力研究センター講師）

## 特任准教授ゴミンダ・ポナン ペルマ先生の活動報告

講師 錦織 宏・特任専門職員 三浦 和歌子

平成23年2月7日から3月18日まで当センターに滞在されたゴミンダ・ポナンペルマ先生は、医学教育学分野で博士号を持つ数少ない研究者である。今回の滞在中は、学生や研修医へ直接指導する機会は少なかったものの、在任中に来日したアフガニスタンの医学教育研修員に6回の講義を行い、ひととき高い評価を得た。また第31回東京大学医学教育セミナーでは「In pursuit of the ideal mix: The Undergraduate Curriculum of Faculty of Medicine, University of Colombo, Sri Lanka」と題する講演を行い好評であった。3月17日に2度目の講演が予定されていたが、残念ながら震災のため中止を余儀なくされ、また本来の予定を繰り上げて3月18日に帰国の途についた。この時、見送りに行った京成上野駅のそばに早咲きの桜が咲いていたのを少年のように喜んで見ておられた姿が印象深い。わずか6週間の短い滞在ではあったが、アジアの医学教育の将来を担うゴミンダ先生を迎えた意義は大きかったように感じている。



▲ 第31回東京大学医学教育セミナーで

## 東京大学医学教育セミナー（平成23年4月～9月まで）

講師 大西 弘高

第33回 4月28日（木）18:00～19:30 医学図書館3F 333会議室 講演者：大西 弘高 先生 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師 テーマ：「客観性のある臨床技能評価とは～医師国家試験改革への展望～」
第34回 5月27日（金）18:00～19:30 医学図書館3F 333会議室 講演者：北村 聖 先生 東京大学医学教育国際協力研究センター 教授 テーマ：「新臨床研修制度の評価：私見と今後の展開に」
第35回 6月21日（火）18:00～19:30 医学図書館3F 333会議室 講演者：錦織 宏 先生 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師 テーマ：「医学教育研究におけるアクション・リサーチ～教育の実践を研究論文にして世界に発信～」
第36回 7月28日（木）18:00～19:30 医学図書館3F 333会議室 講演者：種田 憲一郎 先生 国立保健医療科学院 医療・福祉サービス研究部 （地域医療システム研究分野） 上席主任研究官 テーマ：「チーム医療とは何ですか？何ができるとよいですか？ エビデンスに基づいたチームトレーニング：チーム STEPPS」
第37回 9月14日（水）18:00～19:30 医学図書館3F 333会議室 講演者：クラレンス・クライター先生 テーマ：「医学教育における評価概要—学生の学習に対する評価のインパクト」 東京大学医学教育国際協力研究センター 特任教授 米国 アイオワ大学医学部医学教育研究支援室 教授

医学教育セミナーは、概ね月1回のペースで当センターが開催している講演シリーズである。種田憲一郎先生にお願いした7月のセミナーは、医療安全という難しい領域に対する包括的プログラムである「チーム STEPPS」に関して、さわりの部分を体験できる内容であった。当初予測を大きく上回る参加者にお越しいただき、資料の準備が追いつかないなどのご迷惑をおかけした。この場を借りてお詫び申し上げます。

2011年4月からの新しい試みとして、UStreamを用いた中継配信がある。また、機器やソフトウェアへの不慣れもあり、上手くいったりいかなかったりだが、徐々に改善する予定である。「足を運んでもらえる人が減るのではないか」という懸念も一部にあった。しかし、会場に来ていただく参加者の数は特に変化なく、来ていただくのとはほぼ同数の聴衆がUStreamの向こうにいる印象である。特に遠方の先生方から、「東京までは行けないけど、UStreamで見てます」と声をかけていただくことが増えて、嬉しいがぎりである。中継配信後の動画は、各種サイトにアップロードしているため、見逃した方にも「東京大学医学教育セミナー」で是非検索して見ていただければ幸いである。



▲ 第37回医学教育セミナーのUStream中継配信の様子

## 外国人客員教授就任挨拶

Clarence Dennis Kreiter, Ph.D.

アイオワ大学医学部 家庭医療学・医学教育研究支援室 教授  
招聘期間：2011年7月19日～12月28日

Allow me to introduce myself. I am Clare Kreiter, the new visiting professor at IRCME. In my other life in the USA, I am a quantitative educational research psychologist and a professor at the University of Iowa College of Medicine. As an educational psychologist, I am interested in statistical and measurement techniques that promote both sound assessment and learning research. At the University of Iowa I also help train medical education graduate students. Medical education graduate programs are relatively new, and our discipline is still struggling to find an identity and looking for ways to make a practical contribution. While there are many areas where medical education research can make positive future contributions, we first need to train our graduate students as the next generation of skilled researchers. To do this, our students need a strong background in research methods and a solid theoretical foundation. International collaboration and sharing across educational institutions will ultimately help in defining a widely accepted educational curriculum that best prepares those interested in medical education and medical education research as a profession. The visiting professorship at IRCME provides an excellent opportunity for our two countries to learn from each other. I am very appreciative that Todai has shown such a willingness to overcome the obstacles presented by language and culture and has provided this wonderful opportunity for collaboration.



While here at the University of Tokyo, I hope to develop mutually beneficial learning and collaborative research relationships that will continue beyond my tenure at this great university. For this reason, I invite anyone from the Todai academic community to discuss areas where we might have mutual interests. My door is always open and I have so much to learn from you! Thank you for this wonderful opportunity.

## 着任挨拶

大学院生 春田 淳志

2011年4月から医学教育国際協力研究センター所属の大学院生となりました春田淳志（はると じゅんじ）と申します。これまでは東京北区の王子生協病院で家庭医として働いてきました。多くの人が家庭医というの聞きなれないかもしれませんが、診療は総合内科・総合診療の分野で、外来や入院対応、訪問診療等を行ってきました。視点としては臓器だけではなく、その人全体をとらえる生物—心理—社会の視点や家族全体の個人をとらえる視点、さらにコミュニティ全体を診断あるいは介入したりする視点などを専門的に勉強してきました。また診療だけでなく学生・研修医・多職種に関わる教育業務や組織のマネジメントなどにも関わってきました。そのような経験を経て今は医学教育分野の魅力にひかれ、医学教育国際協力研究センターにお世話になることになりました。現在はポートフォリオや専門職種間教育などの研究をすすめながら、教育実践としてはメンタリングや病院の回診なども行っております。学生という身分でもあるため、ぜひ皆様からの教養をご教授頂きたいです。まだまだ未熟な若輩者ですが今後ともよろしくお願ひします。



研究生 小林 智子

4月より東京大学医学教育国際協力研究センター所属の研究生となりました小林智子です。島根医科大学を卒業後、JA長野厚生連佐久総合病院にて初期研修を終了し、総合診療科後期研修を経て、この春までスタッフ医師として勤務していました。

千曲川のほとりの八ヶ岳と浅間山を見渡せる佐久総合病院では病棟・外来・訪問診療を経験し、まさに臨床一色の生活をしていました。コメディカルや同僚たちと共に患者さんと向き合った時間は今振り返っても貴重なものですが、一方で医師としての経験年数が増えるにつれ、研修医の先生達に指導する場面も増えていきました。徐々に彼らへの責任も負う立場となっていく中で、次第に体当たりで研修医の先生達に教えていくことの限界を感じるようになり、教育に関する知識を身につけたいと思うようになったのがこちらで勉強させてもらうようになったきっかけです。

4月からの新しい生活は、様々な分野の先生方のお話を聞く機会も増え、これまで現場で実践していたことが理論で裏付けされることに気づかされたり、教育についての新たな視点を得られることも多い新鮮な日々です。また研究手法の“いろは”から指導していただきながら、研究にも携わらせてもらいはじめ、臨床とは違った面白さを感じているところです。まだ慣れない点も多いのですが、今後ともご指導の程どうぞよろしくお願ひいたします。

# センター新ホームページ紹介

技術補佐員 澤山 芳枝

センターのホームページをリニューアルした。今回は、以前のコンテンツを元にデザイン・作成を業者に依頼した。大きな特徴は、Ustream 中継できるようにしたこと、Wordpress によりホームページ更新が誰でもできるようになったこと、念願の英語版も作成されたことである。Ustream については既に数回、東京大学医学教育セミナーを中継していて概ね好評である。

センターは医学教育国際協力研究部門、医学教育国際協力事業企画調整・情報部門、外国人客員教授部門の3つからなっており、昨年10周年を迎え、各部門とも多くの活動の記録がある。講演・イベントも多く継続的に開催している。そこで、トップページからの各コンテンツへの閲覧がしやすくなること、写真を多数掲載しセンターの活動を視覚的にも分かりやすくすることを目指した。各部門でコンテンツの見直し更新を行い、秋山事務補佐員（7月退職）と筆者、業者の3者で細かいデザイン（色、フォント、配置）について時間をかけ検討し最終的にセンター全員で決定した。この場を借りて皆様にご協力のご礼を申し上げます。



▲ センター新ホームページトップ

## ●センター日誌 | 2011年4月～2011年9月 |

4 APR		7 JUL	
27日	第1回東京大学医学教育基礎コース	4日(～7月15日)	JICA インドネシア国立イスラム大学 大学運営短期研修受け入れ
27日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・健康講座	19日	クラレンス・クライター外国人客員教授 (アイオワ大学医学部家庭医療学・医学教育研究支援室 教授) 着任 (12月28日まで)
28日	第33回東京大学医学教育セミナー (大西弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)	20日	第4回東京大学医学教育基礎コース
5 MAY		28日	第36回東京大学医学教育セミナー (種田憲一郎 国立保健医療科学院 医療・福祉サービス研究部 (地域医療システム研究分野) 首席主任研究官)
18日	臨床診断学実習 (模擬患者による医療面接実習総論)	29日	平成23年度第1回運営委員会
20日	第2回東京大学医学教育基礎コース	8 AUG	
23日(～10月3日)	臨床診断学実習 (シミュレーターを用いた技能実習)	3日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・健康講座
23日(～10月5日)	臨床診断学実習 (カルテの書き方)	9 SEP	
24日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会	2日(～12月9日)	M2 PBL チュートリアル教育
25日(～10月5日)	臨床診断学実習 (模擬患者による医療面接実習)	12日	第5回東京大学医学教育基礎コース
27日	第34回東京大学医学教育セミナー (北村聖 東京大学医学教育国際協力研究センター教授)	14日	第37回東京大学医学教育セミナー (クラレンス・クライター 東京大学医学教育国際協力センター特任教授)
6 JUN		14日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
20日	第3回東京大学医学教育基礎コース	21日	臨床診断学実習 (New England Journal of Medicine を用いた診断推論)
21日	第35回東京大学医学教育セミナー (錦織宏 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)		
28日	第11回医学教育国際協力研究フォーラム		

このニュースレターの発行にあたり、野口医学研究所に多大の御援助を頂きましたことを感謝申し上げます。

### 編集後記

空を見上げるとうろこ雲が広がり、秋の気配を感じさせる今日この頃です。さて、センターでは4月より新たに医学教育基礎コースがスタートし、医学教育セミナーとともに、ますます活動的な秋を迎えています。センターの活動をいつも支えてくださっている皆様に、感謝の気持ちとこのセンターニュースを通じて、私共の活動の軌跡をお伝えできましたら幸いです。次号も実りある充実した活動報告ができますよう、センター一同日々邁進していきたくと存じますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。(内)

### 発行元

発行 2011年10月31日  
 発行人 山本 一彦  
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター  
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254  
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp  
 印刷所 株式会社トライ